

驚談傳奇

卷之四

~13
4391
4



113
14391
7

鷲談傳奇桃花流水卷之四

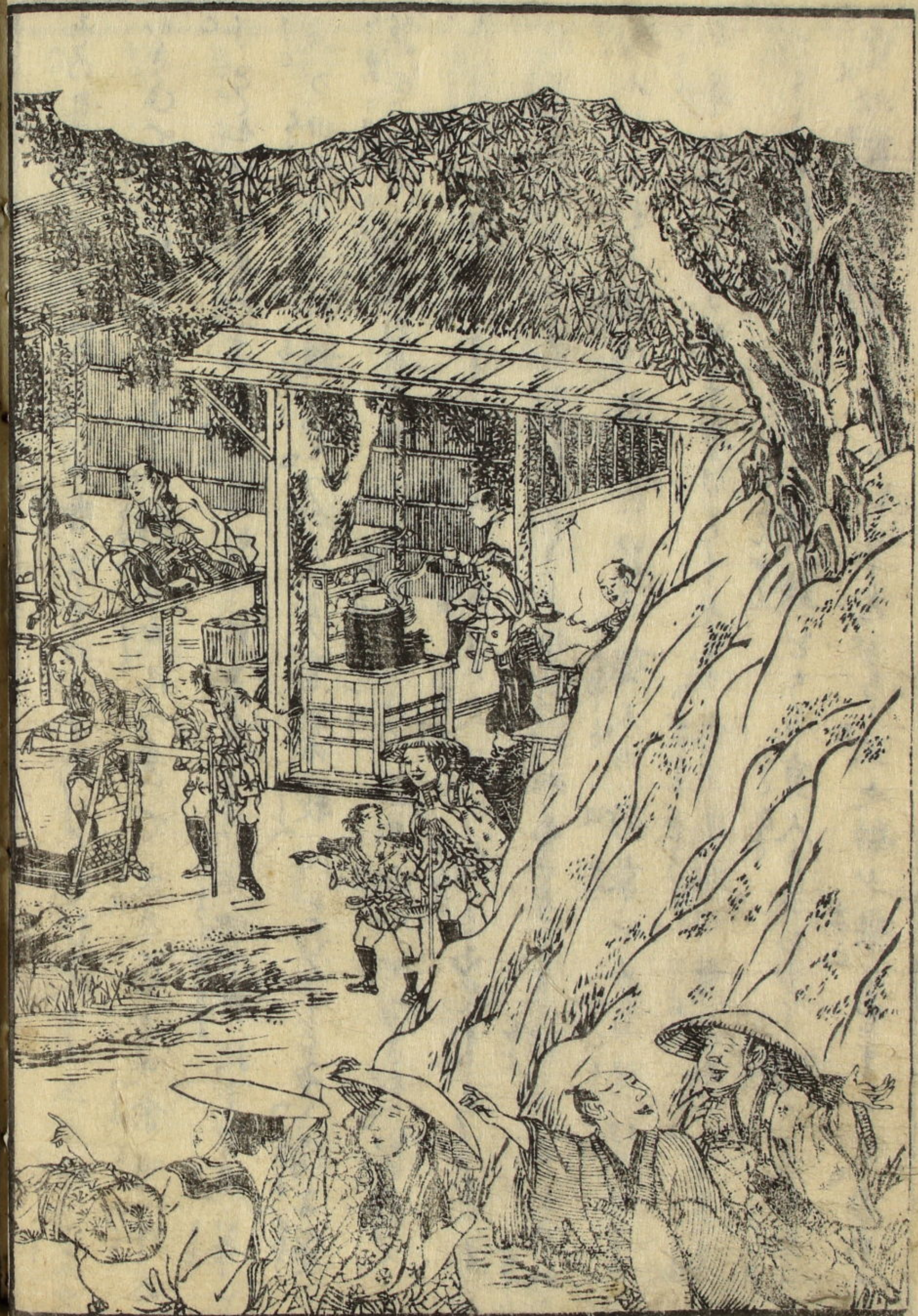
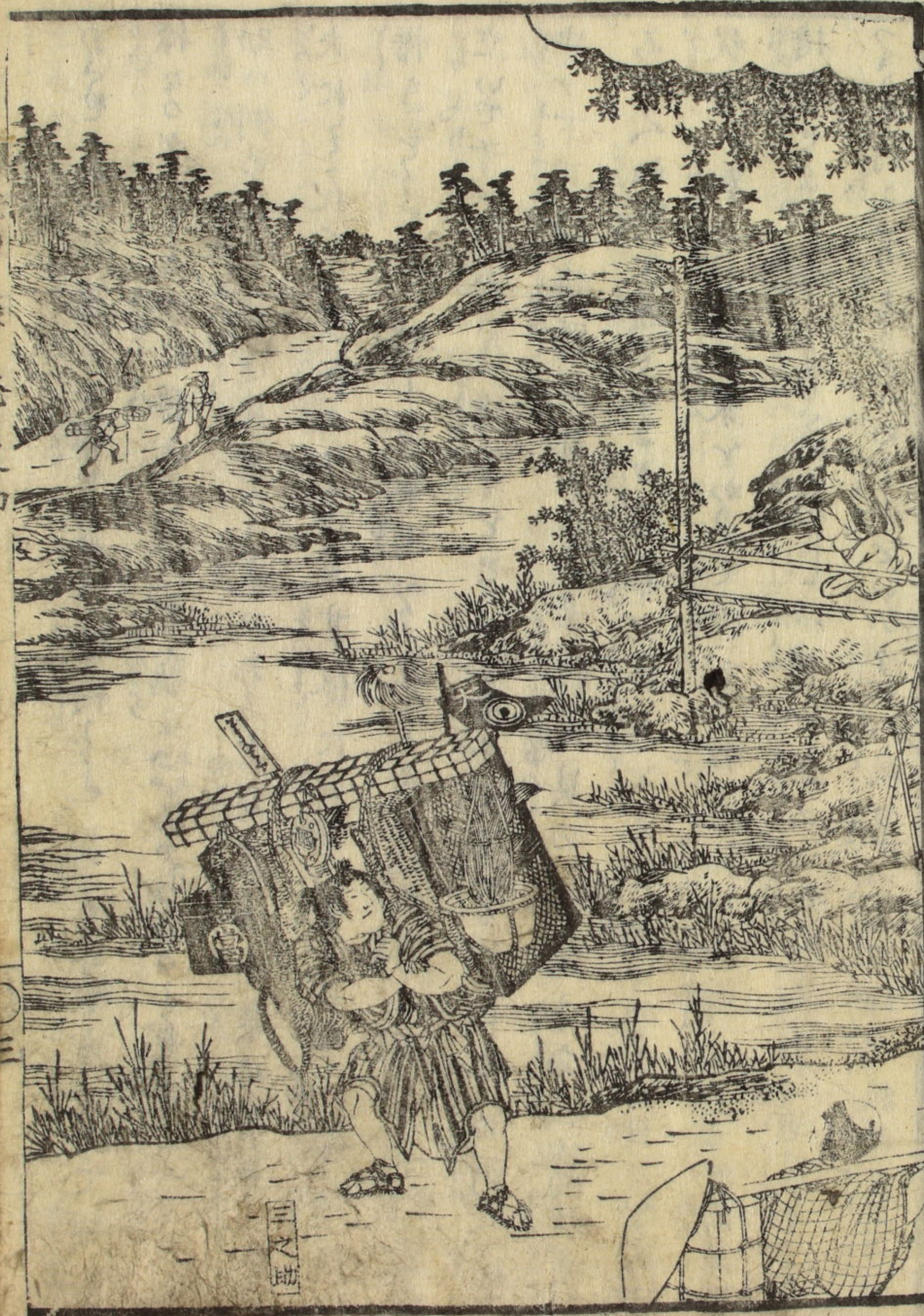
江戸 山東京山 編次

第十一回 幽栖



生死涅槃猶如昨夢と説あるもわんごにこそおぼやききりの過に
 わんごの夢あり今日の夏も又明日の夢にして金鳥の翅玉兔の
 足夢より夢に歩行する人ごとくまうがくた様寐どじ去程又
 尾峯の紫朶六と野外の煙とじ事とて後竊に三之助とともひ
 松江の庄にゆりて山中の家とてうづらるに左衛門の國字寺で自殺
 じ相木小君寺家と追きて其行方とあるのうゝ梶之助の三之助と
 打ちして心安くするのさうど秋季と愚將とあるさう松金と
 内通の密謀一味のうらふ反忠のりのりて巳又捕へらるべきと





のせむれい此藤川の驛とせし物持ども。りりも手と空くして頭を
 撥るがてても腕に勝りわらうと竊は心とちちるを。さて一日三之
 助の例の如く海道にりて家にあらうと尾峯が手業の糸車にま
 夫にまられてより花のすがら由其終に。とりつゝらぬ山櫻都に
 惜きまがらう。時しも暮雨うりり。たれば尾峯の周章て門邊小
 立を干ておたさる。深草とさうりまんとあつるとりしも當所乃縣
 守が下司横嶋悪五郎といふ若侍雨具の用意もあ。一人の従者と
 あらう此所と通りたる尾峯が容色と見て色づきのもの目とわらう
 従者に對ひりれい此家とかりて待てさ程小。汝の宿所にうりて雨具と
 持茶せよと命とりを來し。吸筒分盒の一色と。うづらへ尾峯の跡
 つまて内より。あらぐのうりといひたれば尾峯の悪五郎と紋花邊の上か

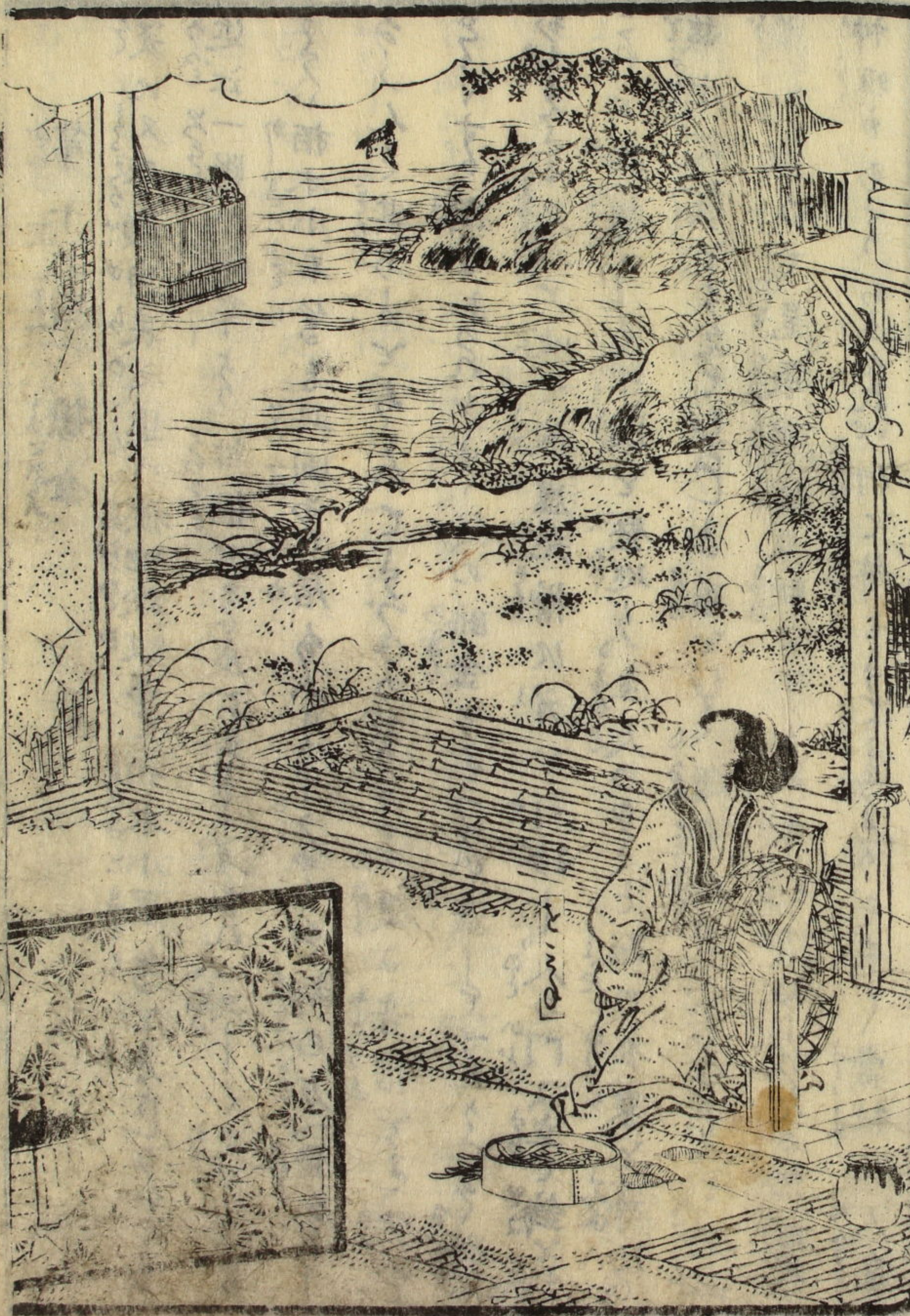
せしめ、やくくしてつまかりたえらるの雨やうりたればこそ。かくる
 りせむれい所といひあらう。は入ゆひたれらんのとき貪まらうし
 せめてお茶と立んとせし悪五郎か。とせめ。いやくとれめいあうい
 せむれい、うい大屋川の船よりに行んとせしが雨りいひのそらあ故
 途中より。のりゆし幸なる吸筒分盒。うりてひしきやさんと酒樽を
 うんとつけ尾峯が酌めて数盃とやむひけ。あうらう詞をまどへけ。酒の
 不得手の尾峯へも。無理に飲る悪五郎花盗人ととれらる尾峯の
 せむれい。さるらる。縣守の下司とせん。柳に風の吹き。い。とらうり
 りせむれい。悪五郎其圓よのり。不良の門は入んとすと尾峯の操と
 ちがらうと。顔に紅葉と散し。髪程く。わらうまらう。とらうり。とらうり
 三之助立候り。此体と見て大に怒り。悪五郎が襟首掴で引候

新^{しん}とわけて連打散々に打^うたれども三之助が力にあそれゆゑと叫^よび
あつた傍^{かたはら}に落散^{おちちぢ}する尾峯^{おしほ}が櫛^{くし}と手をやく拾^{ひろ}ひ躑^{あひ}つ轉^まつ逃^にげ入りけり
○これへ借^かりた爰^{こゝ}又^{また}都^{みやこ}の人^{ひと}にて名^なと山科屋^{やまのけ}弥^や四^よ六^{ろく}とりの呼^よ用^{よう}
ありて三州^{さんしゅう}より藤川^{ふじがわ}の驛^{えき}亭^{てい}に泊^{とど}りりるが里人^{さとびと}のまゝ東^{ひがし}に送^{おく}て
そを行^ゆれば何^{なに}夏^{なつ}のやわらんと宿^{やど}の主^{ぬし}またづひに主^{ぬし}曰^いふ世^よよ
められざる物語^{ものがたり}にて當^{あた}野^のの宮地^{みやぢ}山^{やま}の昔^{むかし}持統^{ぢつむす}天皇^{てんかう}幸^{ゆき}行^ゆるゆゑ
頓^{とん}宮^{みや}ありしころろなる昔^{むかし}より殺生^{ころもぎ}禁断^{きんたん}の所^{ところ}あるに此^{この}やど彼^{かの}山^{やま}の
麓^{ふもと}に住^すまふ尾^{おし}峯^ほとりの宮地^{みやぢ}山^{やま}のわけて宿^{やど}鳥^{とり}とる山^{やま}中^{なか}へ
とりかとりたる頭^{かぶ}櫛^{くし}と證^{あかし}扱^{あつか}として彌^や捕^と也^や今日^{けふ}暮^{くれ}六^むの鐘^{かね}と相^{あひ}首^づ
大屋川^{おほやがわ}へ沈^{しづ}みかけらるる夫^{おつと}と又^{また}人^{ひと}寺^{でら}のわけてをせぬれり
金子^{かねこ}百^{ひゃく}兩^{りょう}とついで罪^{つみ}と購^{かひ}は令^{しむ}らるるもかみりこれもしじしりの

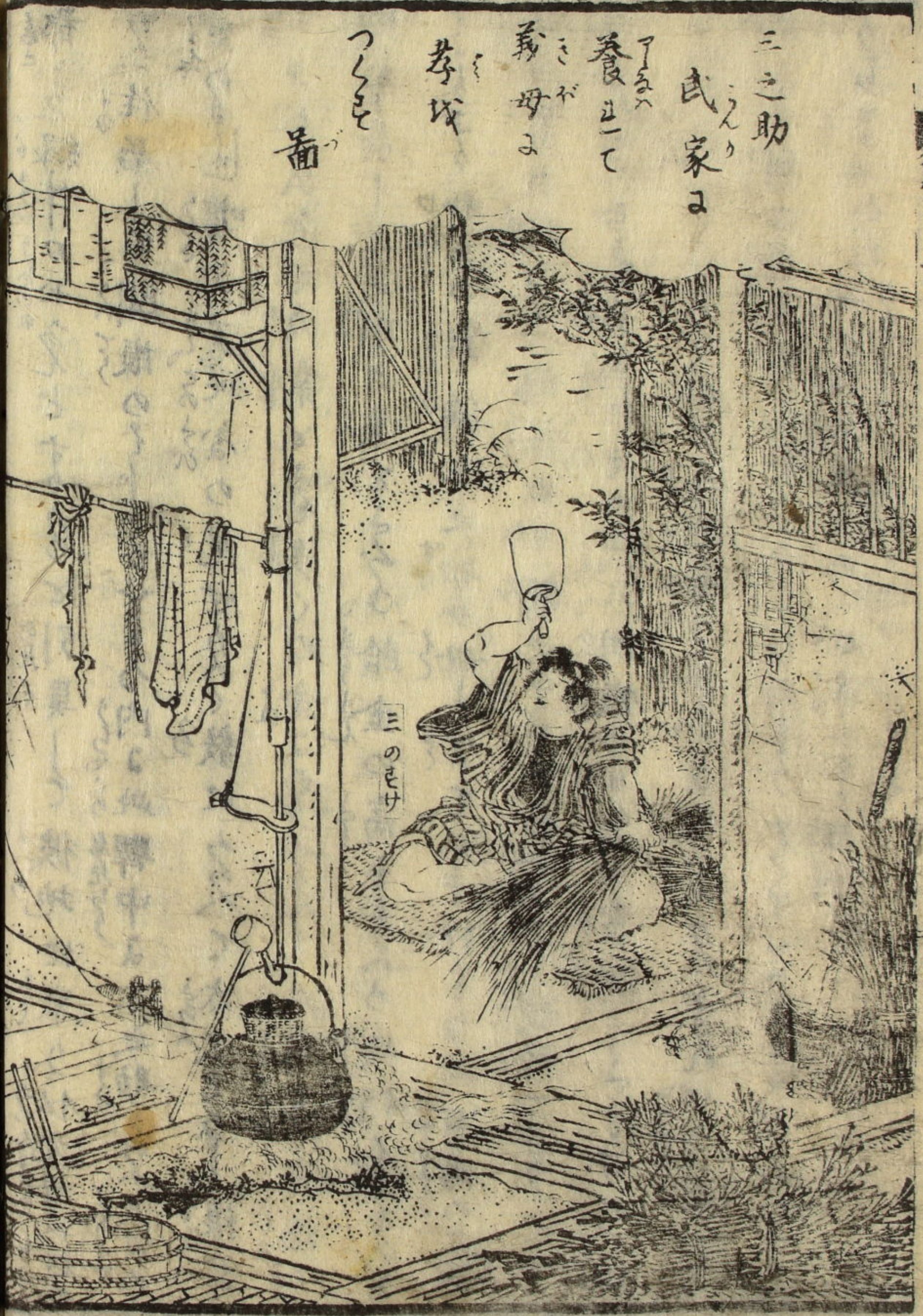
さざめありかの女^{おんな}娘^{むすめ}もわらべつゝる時^{とき}へおとまりしも母^{はは}の命^{いのち}と助^{すけ}ぎに
養子^{やしよ}の三^{さん}之^し助^{すけ}と申^{まを}しかたを強^{つよ}くれ歳^{とし}端^{はた}のちぬ小童^{こどう}ならべ金の才^{さい}覚^{かく}い
あひもよらぬ血^ちの涙^{なみだ}してとるころと語^{かた}るうちに主^{ぬし}の女房^{にようばう}が傍^{かたはら}
主^{ぬし}はむい彼^{かの}尾^{おし}峯^ほと申^{まを}し下^{した}司^しの悪^{あく}五^ご郎^{らう}が心^{こころ}にたゞんじしゆゑ
渠^{この}其^{その}座^ざをて尾^{おし}峯^ほが落^おち櫛^{くし}と盜^{ぬす}と戀^{こひ}と叶^{かな}えぬ遺^い恨^{こん}とやと
聞^きばきくやどむむじしうごらるるまをとなをばはて跡^{あと}四^よ六^{ろく}主^{ぬし}と對^{たい}
きててもくしつゝた女^{おんな}が身^みのうへ金^{かね}を助^{すけ}る命^{いのち}ありば百^{ひゃく}兩^{りょう}の金子^{かねこ}は
我^{われ}等^ら合^あ力^{りき}のうまをばししゆゑ
わらど突^つき一^{ひと}命^{いのち}と助^{すけ}るを時^{とき}刺^さとらるるまをばはて跡^{あと}四^よ六^{ろく}主^{ぬし}と對^{たい}
これに主^{ぬし}夫婦^{ふうふ}も大^{おほ}によろらば村^{むら}長^{ぢやう}へまらるるのうまをばはて跡^{あと}四^よ六^{ろく}主^{ぬし}と對^{たい}
主^{ぬし}村^{むら}あ跡^{あと}四^よ六^{ろく}其^{その}余^{あま}役^{やく}くの里^{さと}人^{びと}等^ら大^{おほ}屋^や川^{がわ}にをせつけ跡^{あと}四^よ六^{ろく}と

尾峯が親族多りといひしを金子百兩といひて取せしめけり
 罪人けいこの武士を莫の由と人をもて縣守へまことえのけり古法
 られはくじしとどとさう昔にまうせ金とあうめて尾峯が縄目と
 中村長へ渡され尾峯のあつたあつたぞく。三之助もめくとまうて
 此所へけりけりことに喜ぶとまうて更なるかて尾峯の三之助と
 ともろの村長主寺にまうてとて旅亭にけり此人ぐよ礼をのて殊更
 弥四六小の詞のむきりといひて大恩と謝しこれの弥四六尾峯は對
 今の親といひれて却て迷惑合カと百兩の三之助が身代金
 こそよりいひて合点が行まいりて我活業へ見せ物師が此とび
 矢矧の橋のわたりける 橋長二百八間東海道 佛光寺
 来四月よりより 弥陀如来開張のりとき 其賊よあてりて利と得と

都より縁半刀玉とんとするのりて引具し彼地に来り仏光寺の辺
 のり住居し開帳のりどまるまう内此驛中は三之助と大力の
 童あるは噂よ此夜の見せりの数にうえて太夫とまう浪卒
 下りといひて力業とさせ多くの金よあつてと此旅亭よ泊り
 南あつて三之助が家とまう給金の高をまうり抱行んとまう
 といひざる和主の難儀三之助が母とまうてかへけもまう百兩の三之
 助が身の代あり開帳の日数六十日とまうりて我目づり七十
 兩とまうと百兩の身代へ開帳の日が當斯うまうけり金
 あれは礼とまうけて殊の外迷惑するところやうにのりこれに傍よまう
 居る宿の全きまうてあるらめり見たりなまうまうと
 うらまひぬ 斯て宿彼悪五郎の尾峯がと縣守に
 のまきこえて此地と逃のりけるまう



新編 浮城物語 卷之六



三之助
武家
了
養
義母
孝
つ

三のり

新編 浮城物語 卷之六

第十二回 撥金

爰に又春瀬由良之進の彼地獄坂を栢木小君等と見じらひらんらん
 近江一國の秋季より徘徊をせらるる一月あらば久く足とをも
 ぐく栢木小君等も此國の居るまどくくど都の方へ登るり
 あらんと其あととあらひてさづみのりるが更は音信ともあらず
 ぞくする間あのれがさうの路金ともつの盡してせんとさう慰ふ
 あらざる尺八と吹て族虚无僧に月と打珍し人の門は立て錢とも
 これと路銀とも中國と歷巡り主人のゆへと敵の在家と尋はす
 縁中に歳とさえもしましま春としく猶東國をさづみらぬと東海
 道とさらりて尾張國宮の駅よりさらぬ年來あらば熱田乃
 神垣もあらりらるらんば行て拜ともさすもりそもく當社の人皇

十二代の帝景行天皇の御時より御鎮座まりて東海東山兩道
 第一の灵社まれば信心肝はゆいと遠くさらりて主人のゆへの饑と
 復して世につる時はゆいとあらんと社頭おぬらづまてあらずく祈念
 志々々の時へも黄昏のころらるられば今宵の夢とむらんと寐覚の
 里につらりけらる地あり路乃傍に物ありと見て拾つるよおもを
 百兩のまりの金と服紗ふ包ともあり由良之進大は驚き何れか此
 おうりらる包の内はまじらやわると傍ある古社に腰うらりけて其
 色とひらき見るに黒染の片袖と財布に入る百兩の封金有り
 熟く視まへ以色金に去年地獄坂あて山賊につぞの追殺す時
 取おちりる金にして封しらる山中の家の縫印と印されらる紗とも
 あらず財布も猶其時の終り又色一服紗の端は白粉と縫付

是に星合氏と記したる由良之進更に其故を曉しざらん包と膝の
 のせて腕と組首を右左へ傾てあざしく思案して心中にありし我
 おろしとるどたかの山賊以金とひろひとて賊の首とて今迄貯之
 らぐべき謂はし包と一服紗の端に星合氏とあるしとるハ彼星合
 梶之助が家の品たるべし過るころ都にわたりて彼が巷説とて
 秋幸公に對して邪惡の行ともあり更のつきて逐電あるはし
 此更とて氏王君に疵しなり彼が所為のいりたるやんと梶之
 助にゆめりあひしとるひてか月ぐらとすとすしとるに今此服紗は
 包とる金再我手ふ取らるハ契田明神忠義は辛勤する志と
 感応ましく授けひとるにとるがうと猶通井の梶之助此
 金と指の再爰におろしとるあうん大金なれば必是の梶之助也

渠と捕へて可為やうとてのきと百兩へ懐中にとりて石とらりして
 元の呀小捨おれた社の内ふとわくつ替竹と見えし一腰と膝は
 とうせ餌とあれて獸とるころ今や来ると待居らる斯てや時校り
 日へ暮れれど人の影も見えざれば今宵ハ此社にわくさな名こ
 ろいさうめて心と寛まる猶まらふ向の方より爰へ来り人うけ
 見ええれば目ととめて居らるにやがて近くあうと月うけふ
 まろしえれば深篇笠は面とわき黒き小袖は朱刀室の両刀と帯
 さながら浪人と見えざる者金のわたりにりり篇笠のうらしとる
 爰彼呀窺ひえる体並の丈育のつと見おろえある梶之助と疑
 せしうてとととうと見え用意の一腰ししうふと此方も天蓋下
 面とわくしと彼が背後ふまのびらるといあうとてかのほくみと

拾ひさう。おーいさきと懐にさうの立さうんとあーさうと由良之進
 詞もまじくも錨と去りと捕へて后のうへ川をを膽やうんち
 又ておどろかする気色もさう。篇笠取て片方に打たせて
 柄子手とかる由良之進是と見てさうさう。錨と突放ち飛越起は
 天蓋とかなぐり捨双方をらーと切むとバカとカの十文字月の光は
 又のゆいゆいに顔と見交て「アア兄おや人由良之進どの」さうさ
 弟の簷作さうさうさうさうと両人さう寤覺の里の夢さうさう
 知果て詞もつらさうさうさうと兩人の心と刀室にさうさう由良の進
 打さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 一夕の談にのらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 先にさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

両人社内に對座一由良之進先は詞とさうさうさうさうさうさうさう
 更どさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 漆さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 いろいろさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 物語のゆいゆいさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 國司曾根松家乃家臣箕取氏の養子さうさうさうさうさうさう
 いろいろさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 主人より暇あつり、それさうさうさうさうさうさうさうさう
 かおさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



此の繪は
 いふれの
 謂 ころよ
 わらむ
 本文に
 讀んで
 あるべし



京島
 説
 天竺之
 口

一家の縁と断ゆかの鶴の女の身ありとて、姉おあさぐのみを某が
家にありて逢坂の関のわたりに云人まぐりくくくくくくくくくくく
姉ともろて我々の侍女の奉公すると偽り、彼星合提之助が
妾とありゆきくるに一夜提之助が僕牛平といふもの周章く
来りてゆみかう、鶴の織平といふものと密通あり、今宵こそ
わすしきて、御主人提之助との両人と手討にこそまじり不美
の証拠にこれありとて、鶴が自筆おて織平が方へはくくくく
夫婦の誓紙と見せ、手討の死體と云ふべしとあるおつれども
せんまぶくその夜提之助が家入りとんと地蔵ざうへはかりく
とり一も宵闇乃暗まがま、あやうに曲者に行逢山賊といひこれい
るくぞ捕んとる心より立まらるひぬに渠が切む刀石地蔵と

まりて火花をろと飛散其ひろくち曲者ケ面とらつてとて
猶捕んとして片袖と引断り曲者の逃さるゆつて提之助が家
つり、其夜初て提之助に對面せし以前の曲者は似りつれを
鶴と手討にせり、とつてと怪しれども揭馬証拠われ筆ま
処を、幕の夏彼是めて、四五日の心忙しく打過一日巷説と云へ
地藏坂めてあらぐの夏ありて山中の疑ひや、一家の滅亡
あがつるありとて、大におどろき引断る片袖の袂のうちよ
かりる此服紗に星合氏とあしとるのそと、
此服紗は提之助の物と云へ
我曲者にいひあひする夜と氏王君の病と得ぬひする夜と、同夜
同刺されば病りの提之助に一定せり、さるや、服紗と証拠
とて山中を助んと、其日直る山中の家にまじりし

家へ空家となりて人影も見えぬ。山中どのへ國守寺にて自殺
と空歩の跡とあつて走り地獄坂めて此百兩とひらひ
財布に目おがえりまはね都の方へ落ぬひーあつんところそ
かの地にゆりて四五日が程うかるとうづひりもくれども音信も
ゆきぬば空しく家に飯り斯年月と過し今月某の日鶴が
一周忌の仏更といふに其夜の夢に鶴告て曰我權之助が
馬に謀らきて不義の悪名とけ非今の及にわすれ魂宙宇
にさるうのて浄土の往生と遂ぐ尾張國狹田明神と參詣
あつた我恨をとりまき便りと得たりと告ゆゆゑは離れ復て
修羅道の恨とくさるをばやと今日此地に來り明神へ請
くるよ此包と取落しをあらせ兄上よめりあひへ最不思議

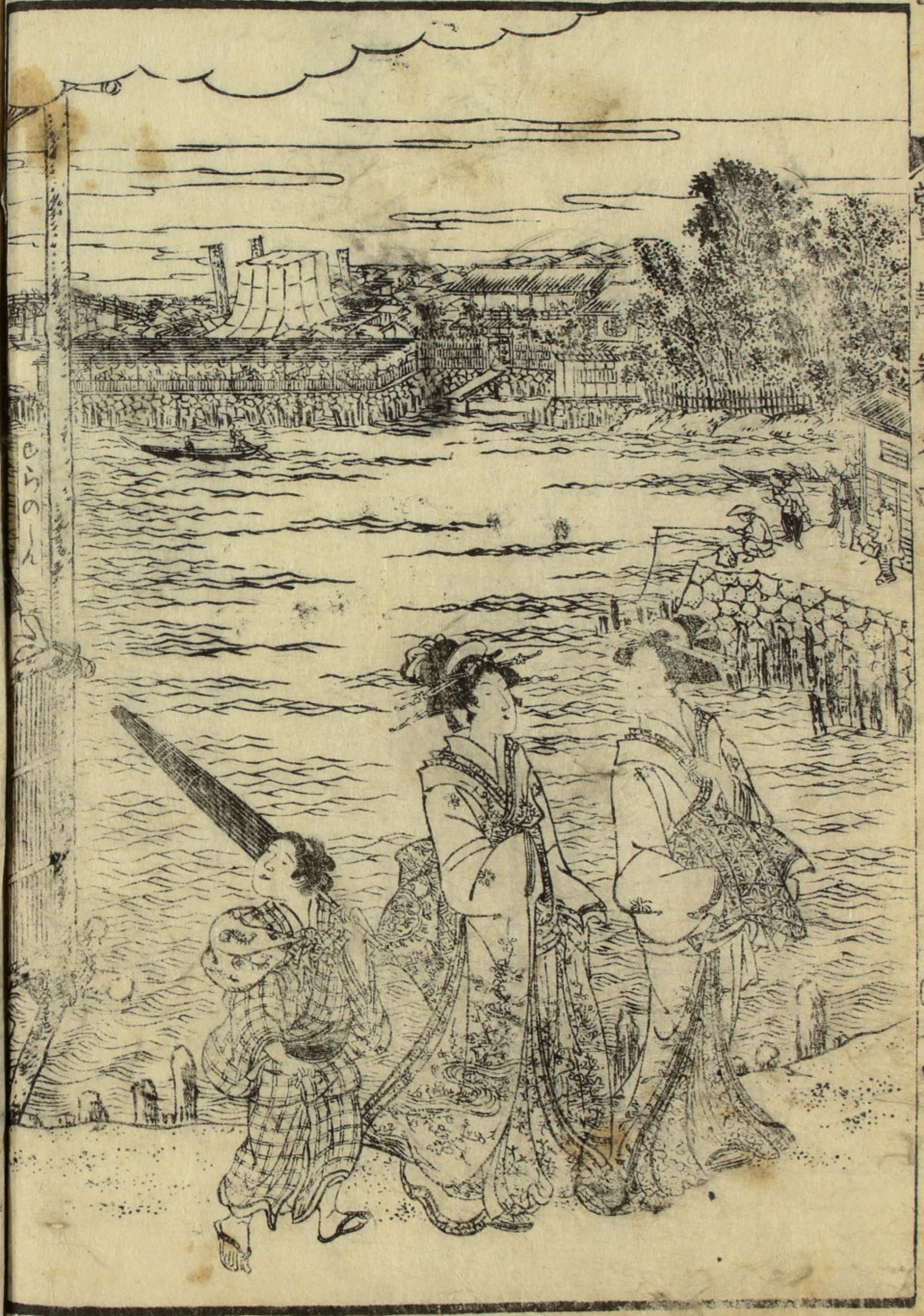
ある更どときりと更細は物語くれば由良之進ハ主人の離れ
知きて喜更かきりや山中左内自殺の事と初と今日
つらまでの更と詳に語りきり此夜兄弟此辻堂は夜と明
鶴が夢中の告もあまは由良之進が志せしを尋んと兄弟
打連て東の方へ下りにる。この作百兩の金の包はくもきり
第十三回 熱闘

ともし、矢矯川ハ水源岐蘇の山溪より落て末と鷲塚川に
西尾に到て二流となり海に入三河三大河の一なり架を橋と
矢矧の橋といふ其名長くつらて殊に名高き長橋あり深草
の元政が矢矧乃橋は書つりてんんと咏しも腰の矢立のすこ
るすこ去程に由良之進篋作等へてに來りて橋のかとり乃

茶店又憩ひその光景と見るに此頃矢矧よりた仏光寺へ都
 某の御寺より釋迦如来遷座まゝして開帳ありたば泰詣の
 諸人群とありて橋上乃往來絡繹しり。利と對る商人ととい
 閑帳乃熱開と的にかけあはり狭しと店とひらき新製乃
 餅に案の味とや。工風の手遊びに小児の目とよろこぶし
 菓と賣りのあり。飴販りのあり。軍書読説經より去程又衰る
 親の因果が子に報しりといふ片輪者丹波國より生捕よりといふ
 鳥獸怪しと奇し物と見える所わり揚弓の射場あり光陰乃
 矢とふるら薬と販ぬ隙中獨樂とまはる。ひる類とて人の
 心慰て足とぞむる人の所せれまで連りて笛と吹音鼓うけ
 ひどま糸のまへへ唱歌のこゑ其熱開しりてとをさしりて猶

此地の光景とらぬやうにのせんみ。風来山人が根草とら
 草紙の筆槽よりといふりやせん。そにりしぬ。さて由良之進纂作
 多へ茶店と立せ。ある驛園の地まればりやうかある人よめが
 ありとありやわると。そかしくかひあはれ。うきとまを閑帳
 とと拜んと橋をまゝりて仏光寺の門前より多に。此大路の
 うらふ薦すれとて假屋とくま。紙りてとれる扁額は童れか業
 をもる侘と彩色乃圖み作りて入口は拍げ。はかみ浪萃らり
 童のか持と。柿色の地は白。深いさる桃を建。笛鼓の音
 ありありとくひをぬま。此假屋のまゝとて。人の山とまはぬ。
 由良之進纂作よりいひ。ある大力の童と武士の子よま。一方の
 用ひと立ぶ。路傍に立て人の目と慰る。いとよむ。

山中が
 忠臣
 由良
 之進
 虚無
 僧
 杉
 柏
 小君と
 たづめ

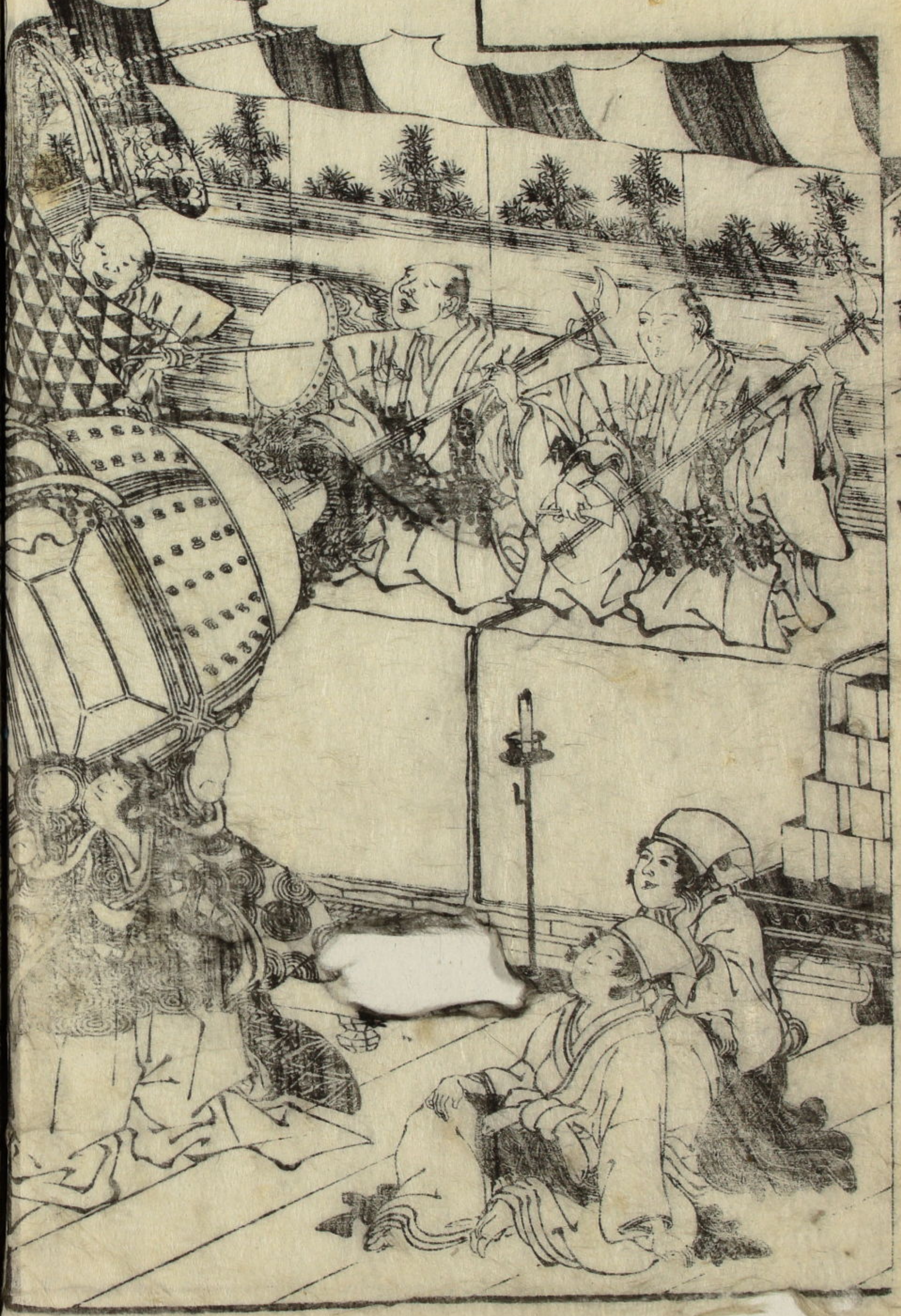
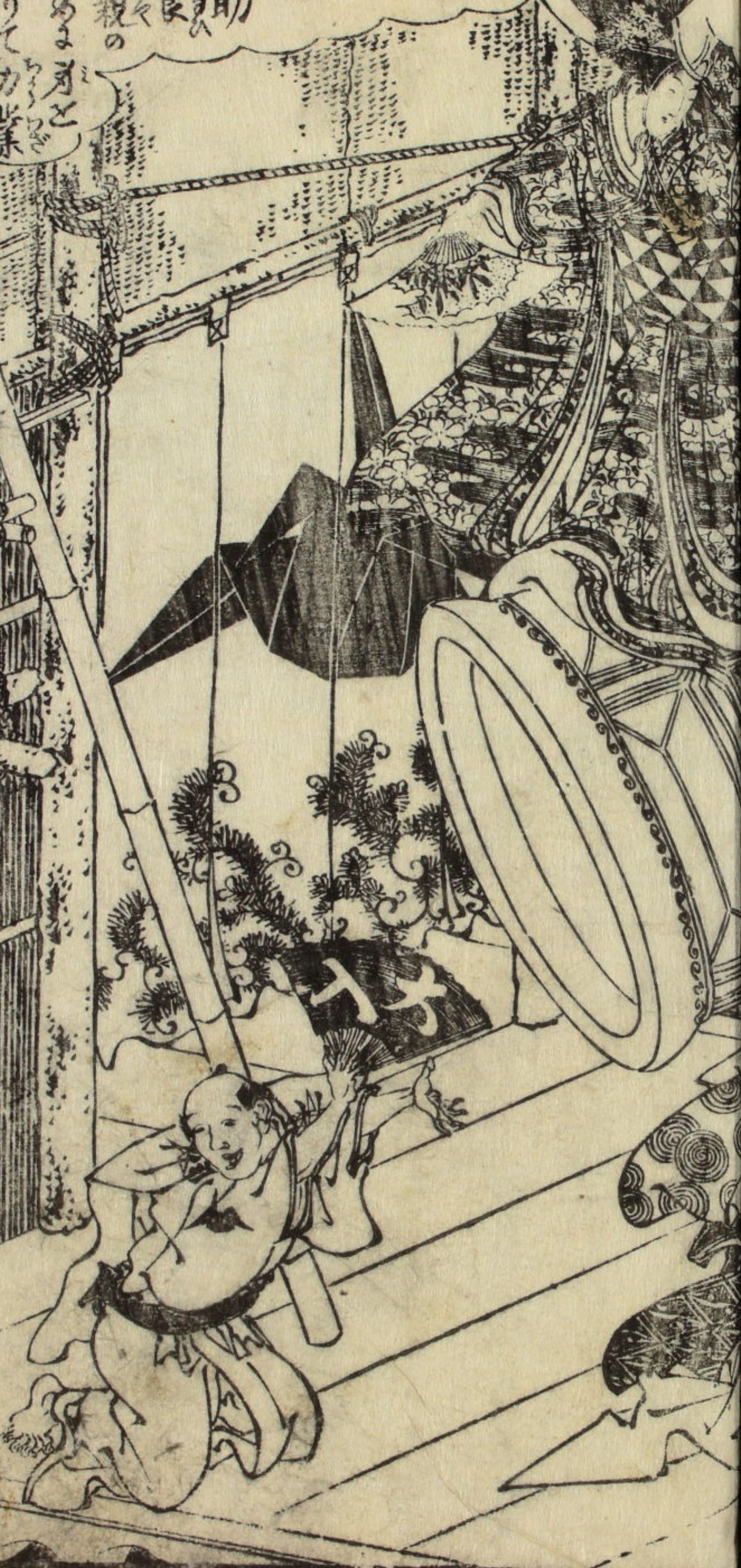
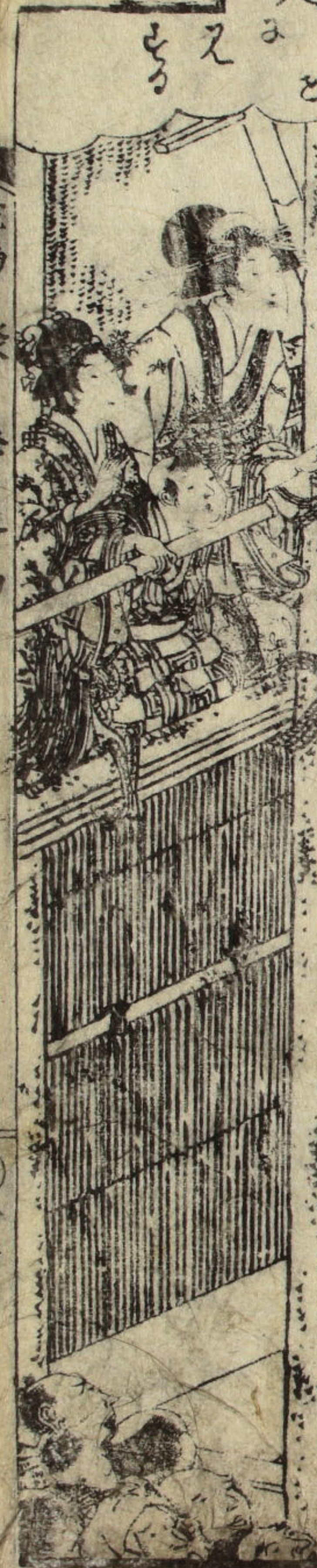


わしをやらん人。簞作一人は隔らして、
 群集と云ひて、兩人うちつきて寺ふまうを、
 関帳と拜て再此所は、
 世のかうりざられば、童がカ業と見物せむやと、
 假屋のうち、
 入て見るに、正百乃、
 群集へ假屋乃うち充満せり。由良之進等、
 見居たり。二尺、
 男どもとて、
 此鐘は、
 縮緬の、
 鐘と四五人の

見物に、
 群集、
 鐘と、
 男どもとて、
 此鐘は、
 縮緬の、
 鐘と四五人の
 見居たり。二尺、
 男どもとて、
 此鐘は、
 縮緬の、
 鐘と四五人の

三之助 養親の

なまよと
うりてか
諸人
とえ



且あやしと。兼作とてこれに諸人とおしり。詞とくさんとなり。さう
 まてまがーのりる諸人の中あての巷説に流布ありて。御主人乃
 耻辱うると。さびら胸とおしり。假屋と立を。前より立く人を
 まのく男に三之助が。住野とて。林多るに。彼山科屋跡四六が。様宿
 と教らして。其家あり。跡四六に對面して。夏の子細を。さびら
 跡四六尾峯が。難美とす。い百兩の月の代あて。三之助と抱。さうと
 うう。それ。由良之進大。おどろた。跡四六おむ。元來三之助の
 近江の。困りて。い。あ。跡方の。子息。あ。前の。年。鷲。さう。い。て
 跡行方。あれと。必定。悪鳥の。餌食。に。さう。あ。い。と。え。も。金。鷲
 童子の。故。莫と。さう。それ。い。さ。が。い。と。の。そ。り。今。さ。う。あ。り。て。ま。よ
 あ。い。さ。う。り。や。あ。る。と。家。來。の。代。く。つ。く。さ。う。と。あ。り。て。諸。男

登巡り。御行方とて。さう。い。に。さう。ぞ。此。所。あ。て。め。さ。う。あ。い。の。ま。い
 幸あり。乃。代。金。と。償。を。異。美。も。あ。る。と。さ。う。今。三。之。助。の。の。の
 さう。い。れ。ら。ま。よ。と。懐。中。さ。う。彼。百。兩。を。さ。う。り。い。て。跡。四。六。が。前。に
 あ。い。れ。ば。跡。四。六。眉。と。緞。め。今。さ。う。い。め。い。と。さ。う。三。之。助。と。か。い。さ。う
 い。て。さ。う。い。僅。乃。日。数。に。ゆ。い。ん。か。の。假。屋。と。は。さ。う。さ。う。諸。色。の。費。さ。う
 金。三。之。助。が。カ。業。の。さ。う。あ。得。さ。う。錢。と。り。て。つ。の。い。が。さ。う。い。れ。ば。元。金
 百。兩。の。わ。ら。に。金。二十。兩。と。さ。う。あ。り。て。い。れ。も。三。之。助。と。後。に。さ。う
 夫。も。三。之。助。と。い。へ。さ。う。證。文。に。彼。尾。峯。と。三。之。助。が。母。と。記。し。れ
 尾。峯。が。一。応。の。詞。を。さ。う。い。れ。ば。各。方。へ。い。り。さ。う。い。と。利。口。氣。い
 い。れ。ば。兼。作。と。い。て。怒。乃。詞。と。い。て。さ。う。い。と。由。良。之。進。日。に
 ろ。て。これ。と。制。し。跡。四。六。は。打。り。い。和。主。が。サ。野。に。さ。う。道。理。さ。う

尾峯と申らんが家にけり。渠と伴ひ来りて再説話をく
百兩と懐におもひ。弥四六は尾峯が住所と伺ひ其地と
りてきり。

第十四回 義漢

衆に又かの尾峯のやうき一令とてをかりしとて三之助に
別してより心づかぬかの悪五郎が更には懲て宵より門を鎖し
燈火をきりてさるる夜方仕更の草と捨りて居しに門
をらくと敵き尾峯どのあるもや對面ししとてその
實るれされ心にゆりて何人あておのするやとさるるに
三之助のゆりてきて来りたり。仔細に對面の人をもと
とて尾峯此詞と實るに弥四六のゆりておのれんとて

草と方燈にうちつけ捕と燈し庭にさるる門乃れとひきき捕
ひかりて照し見るに一人の盧无僧一人の士るるに心中に怪
三之助がとて心とゆりてまゝさるる内よりぬき
西人にゆりて何の用なりとてさるるにせよゆりたるやと
さるるにゆりて近江國松江の家臣山中无湯門と
ゆりて家来春徳由良之進と申者ゆりて尾峯大は喜び
さるる由良之進ゆりておのれに九湯門君の无慙の法最期
沙家七ひて沙浪の盧无僧とてさるるにゆりてゆりたる
何更ゆりてありし詞とて由良之進簞作大はかた
その子細をゆりてゆりて紫桑六三之助と助けゆりたる
自殺の始末三之助が力かりたるに敵棍之助あつてゆりたる

小君らとさう秘んと都にのりしるこ此地向う住て悪即
 うり不无実の罪よおとされ三之助が金の代金のよふあやま
 一令と助りしるよ涙とそそてりのううりねば由良之進 簀作ら
 柴朶六が羞心と感ト尾峯が貞操と讚由良之進も刃のうく乃
 始末さうくううううのら云之助とさうなをさうさうの 話にうり
 由良之進尾峯にゆひ百兩の金子ハ所持せんを外は二十兩乃
 金子へう浪くの刃のううう心アさうそのひがうかん何ぞ
 弥四六に對談さして元金百兩と三之助君とさうりらとさう
 さうのあられしとさうくれバ尾峯が今今のさうさうさう
 畢竟ハラの弥四六の中あうあう今とさうさうさうさうさう
 さうの思ある人ありその恩とを報つる此度の一巻につて

しむくの金と費させんハううのさる所あり集ッ所望の九兩ハ
 りんが償ハヤベしとさう斯るまぶしんれハ黄金の貯ハ
 んぞねぞと代さささ一ヨありと古き櫃乃うらう銅作りの
 太刀とさうは是ハ妻が夫柴朶六の重代にして自殺し
 ころと此劍最期のまら乃遺物せんを我理よ沈むる金乃
 質世にまらさる梵字九二十兩ハ心やとと袱子よふら
 袖に抱えて立んとさると簀作あをうとさうさう梵字九と
 測りかゝる業物一見はとと太刀と乞取方燈のれハ膝行し
 太刀の拵劍の作り一目見るよりうらあどらま抜る太刀と刀室よ
 あさめてさうさにえし其太刀ハ錆磨六郎が家重代是と所持
 めさううううう六郎が緑の涉人あていあうさうやとさうハ尾峯

涙うごきつ。夫の耻辱よれば其本名へあつらふる里しはかく知つて
うんせんとまゝし。今決りのむらりしたる。柴桑市と申す
鏑磨六郎どの、まれ乃果めていあり。簀作曰くあつらふる海
六郎どの浪く乃月とあり。后深に嫁しあひつらん。とんがも
曾根松家の浪人よそ。六郎どの妹深雪と妻にりちて。近
一家乃中あり。ゆああつて縁とまり。互に面會せざるこ
十餘年もの住所えあつたれを。沙月と六郎どの妻と
あるづもあつた。絶て久しき一家の親も。此太刀故は名告
のひ。六郎どの義心よ。耻入我過とあつた。て再ひとん
一家の親以来の縁者とあつた。べいと。三人ののりあつた
うきりなり。こそ簀作尾峯にむらひ。緑者とあつた。あつた

親里とて。実まかりし。語りあつた。といふ。尾峯が。あつた
アもつ。つら。父の。百姓島作とやりの。母の名と
田結とつら。て。則此地の者あり。養濃園に。安十二乃
二歳に双親とて。死別。人買。謀。野上乃こと。の
関が原と。井。間。一夜妻。あつた。客と。あつた。大
无双の六郎どの。思案の外。還。水。は。契。に
阿曾此に買。一年。季も果て。六郎どの。嫁。いと。涙。あつた
袖の露。あつた。と。語り。簀作。これと。不便。あつた
この。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
縁者。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた
信。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた

うらうらむ由良之進これとて歎息なり。无念の最期の遺物
 とらふ家重代の此劍金中人手よりとと。草葉のわけ乃
 六郎の顔の向かうなり。「兼作曰く此の二十兩
 屋峯曰く貪むとてさりのりあつて。そと自由あつた浮世を
 三人ひひく歎息のさうさ。庭の隅のさうさ其金より
 借ませうと立ち若者あり。あひがけられたるれば三人これいと
 打ちかたうさ。知果て詞もゆとりへされば若りの面高れり
 あがり三人と膝をつて杯と尾峯にむかひ。せんまはれと見知つて
 りんく火影にさうさ。あどろく胸をかきまがら。汝の横鳴悪五郎
 りんと无尖の涙にかう。まわつて逐電なり。再此家へ
 きのいへ「悪五郎曰く讎と報ひに来るるといふがく理あり

岡のさのひぬ二十兩持たせつたか。サレんと懐中より金とりが
 尾峯が前にまぎあつた。質にさるに此重代と梵字丸を奪取て
 両肌脱ふと見えろが腹へさつと突立より人へこれへと打撃
 立ちると襲つて。さうさけろ息とつき。我が自殺つまるま
 うと不審にあつて。んひさありきて。今夜此家に来るが
 尾峯の縛りわけ。何方へさうとつとあつて。歴状をくめよ
 口脱かき。戀慕の胸をさうさんと。最前へさうさ。戸口
 とさうさ。いへんとさうさ。あつて。影をさうさ
 木立の茂りに花をさうさ。戸口と明し。さうさ。跡にさうさ
 周まはる。箕子の下に這がえ。仔細のさうさ。尾峯
 どのさのさうさ。肝にさうさ。此腹切是とて。曉る水と

首にりける守袋尾峯にまらせりて、手なやぐひく
そのうちふ三重四重うねい紙色志永二年乙亥の五月五日
曉の誕生富作次男善太郎帯と記しるい紙まてうの
りんが弟二ツのこゝに生別「悪五郎曰笠縫の里乃某ふ
赤松の玉赤板乃宿の親北に親まての養子とありしに、
あま契沖と三河にありて、
遊りてうと。縣守の下司も、我刃にあり出垂るに其程も
りさゆんむ虎の威をり非義非道、姪とそまらど今宵も
猿嚙まて用意せし、畜生道へ誘引く。我刃の因果日志の
悪行今夜初て善人となりたるい。箕子の下りて、
忠義と美心と貞節とあはくごのりのごり、六根五勝へ
まらりり。年来の悪五郎も元の善太よ立り、
上へ

ア譯 饒樂家の重代も、かく自殺仕進ハ六郎とて、
同前梵字九の功德めて極樂国土へ往生す。父上母上よ
對面して、いさ善太さんちとやと讚られ、うごりまを
鬢髪乱く色衰と、あまを海村雨の軒の滴の類い
娘の弟にたりをり、う善太とありたる些二人の姉弟
年来のこゝろさへ、あまにこゝろにつき、意慕の園又、
清月をかりの因果とや、いりんもあま、因果がや、
産の母さあへ七日も、血暈とら、病とて、
其時、土才啼入と、あま、え、
貫の乳け、小懐で、夜中に啼き、
指糊、啼き、憐の子持、

瘦乳も男の子よしのしつとど。ものさびしくは田まのや
 ましうをあらんと血の涙と流せしむや。二つのうきまて手をはり
 り。やうくうきに負うてゑ。生別まの親をいふ。弟とまうを
 女とまうに。敵同士も因果つ。今逢て今別う。うきうきと
 推察せよと要咽う。うきうきと。余所にはる。目わあをいれうきと
 悪五郎。二人にむい。種。のうきうきと。由良之進。涙をいれ
 煩悩即菩提と。釈多う。右の巻をうきうきと。くれ。尾峯。どの
 月のうへ。我くうきにうきうきと。心あはさく。往生われと。うき
 手負がうきうきと。うきうきと。うきうきと。うきうきと。うきうきと
 死る今と金うきうきと。助太刀と。うきうきと。うきうきと。うきうきと
 自殺と覚悟あつるうきうきと。次身れうきうきと。うきうきと。うきうきと

あらうきうきと。うきうきと。善にも法も悪五郎どの。此最期。うきうきと
 縁者の我く。西人世にわうせうきうきと。うきうきと。助が死。涼手あは
 いえそのせんまうきうきと。うきうきと。此うきうきと。うきうきと。うきうきと
 よし。房を詞も気とひたうきうきと。うきうきと。うきうきと。うきうきと
 引まうきと。其刀尖と。うきうきと。うきうきと。うきうきと。うきうきと
 きれてうきうきと。うきうきと。うきうきと。うきうきと。うきうきと

○作者曰山中左門。鏑磨六郎。横島悪五郎。三人終を同う
 せる。自編筆の拙とあれと。前よ發兌の期あり。后よ書肆の
 催促あり。襪とぬきと。凍瘡と搦多う。今日ハ何れ日ぞと。同山
 山妻笑て答て曰。文化巳のうき。正月十日。せんまうき。稿と脱せり

鶯談傳 奇桃花流水四之卷終

